# 巻　頭　言

# 心に残る年賀状と手紙

仙台青葉学院短期大学学長
藤　村　重　文

東日本大震災のあった年末から2012年始にかけて多くの方々から心温まる心遣いのお便りや年賀状をいただいたが、それらのなかから今でも心に強く残っている二通を紹介したい。順序が後先になってしまうが、一通目は神戸市で精神科クリニックを開設されているＫ先生からの年賀状である。「めでたさが　行き交う被災地　共に興さん。東日本太平洋沿岸部、五〇〇キロに点在する大小さまざまな被災地。ぜひ一度、一か所でも訪ねてみて下さい。人生をどう生きるのか、見えてきます。……」という文面には思わず引き寄せられる気持を覚えた。Ｋ先生は1995年１月の阪神・淡路大震災の時に精神科医療活動専門家による被災者のためのボランティア活動を主宰され、避難所訪問・仮設住宅訪問・健康相談・14ヶ月間の24時間電話相談などをなされているが、この度の東日本大震災後先生は８月頃からこれまで何度も神戸から来られて、東北被災地沿岸部や仙台市において各所で十数回に亘って主に「災害と心のケア」についての講演や個別指導などをされ、その活動を現在も続けられている。大震災の被災体験から自己精神を再建し復興するための時期として約２カ月から２年間が必要なことも先生のお話でよく理解できた。

二通目は昨年末に三重県香良洲町のＩ先生からのもので、手紙や鯉に関する書籍とともに色紙も同封されていた。先生とは11年前筆者が医事新報の緑陰随筆に書いた「コイのやまい」を介して知り合って以来、鯉の飼育法や「やまい」の治療法についてしばしばご教示を受けている。お陰様でこの10年わが愛鯉は病気ひとつしたことがない。先生には実際お目にかかったことはないものの大変高名な書家のようで、この度のものは先にお送りした拙著「続々直球・変化球」の後にお送りいただいた。巻紙の色紙には正宗公遺興吟「馬上少年過　世平白髪多　残駆天所許　不楽復如何」とあり、修という名前に重ねて花押がしてあった。今はその色紙を扁額にして飾ってある。伊達政宗のこの有名な詩は、第一句と第四句が絶妙なところで、とくに後者は訳が「楽しくないのはどうしようもない」というのと「楽しまないでどうしようというのか」との二通りある。筆者はかつて「続直球・変化球」のなかでは前者の訳を支持したが、政宗公のほかのその頃の詩を参考にすると、この頃では後者の方が有力のように思うのである。

権謀術策の戦国の梟雄ともいわれた伊達政宗は一方では奥深い文化人であったことでその時代を生き延びることができたのは明らかである。当時江戸を潤していた米の生産領地が震災津波で失われたのを泉下の政宗はどう思うであろうか。